

京都五山——京都を代表する臨済宗の禅宗寺院の中でも最上格の寺院を指します。(右表参照。鎌倉五山もある。)

この寺格は鎌倉時代に始まり、幕府と公家の氏寺5カ所が選ばれました。後に何度も寺格の変更がなされていますが、室町幕府將軍足利義満によって五山制度が定着したのです。尚、龜山法皇ゆかりの南禅寺は別格で最上位とされました。さらに、五山の下位には十刹じっさつ、その次に諸山しよざんという格の寺院がピラミッド型に、全国的に組織されていきました。

寺格	京都	鎌倉
五山之上	南禅寺	——
第一位	天竜寺	建長寺
第二位	相国寺	円覚寺
第三位	建仁寺	寿福寺
第四位	東福寺	浄智寺
第五位	万寿寺	浄妙寺

さて、この序列ですが、僧侶の徳望とか学識の高さを基準にしたものではありませんでした。実は、幕府との緊密度を示すものです。従って、政治権力との癒着を潔しとしなかった大徳寺や妙心寺などは除外されています。おそらく、幕府への献金を断ったことが大きな理由でしょう。実際、寺格に応じた献金が各寺院に要求されていて、室町幕府は重要な収入源としていました。つまり、五山制度とは寺院の系列支配であるとともに、集金のシステムでもあったわけです。

ところで、奈良時代を代表する東大寺・興福寺とか、さらには平安時代の延暦寺・東寺などは

寺院	宗派
東大寺	華嚴宗
興福寺	法相宗
延暦寺	天台宗
東寺	真言宗

全く顔を出しませんね。これらの旧仏教と呼ばれる寺院は長く貴族政治に関与してきたのですが、室町幕府がこうした勢力を遠ざけたからです。

このような幕府の禅宗シフトに対して危機感をつのらせた旧仏教側は、禅宗寺院が建立される度に、延暦寺を中心に抵抗運動を繰り返しました。その影響を受け、臨済宗を広めた栄西も当初は京都では布教ができず、博多や鎌倉で実績を積みました。京都に建仁寺を建てることができたのは晩年のことです。また、道元はとうとう京都には居れなくなり、越前に移って曹洞宗の永平寺を建てたほどです。しかし、こうした圧迫にもかかわらず、禅宗は全盛期を迎えたのです。

禅宗と武家勢力との結び付き、これは鎌倉・室町期を象徴するキー・ワードだと思います。なぜこれほどまでに流行したのか、なぜ武家勢力に尊ばれたのか、当然の疑問ですね。

一番の理由は、本場の中国自体が当時(南宋～元～明)は禅宗の黄金期を迎えていたことです。中国文化＝先進文化なので、これを摂取しようとするのは当然のことであり、禅宗への傾倒が日中共通のコミュニケーションをさらに深めました。両国間で禅僧の往来は極めて盛んであり、僧侶の資格が日中共通で通用するほどでした。禅僧がもたらす最新の文物からもの(唐物と呼ばれた)は幕府にしても魅力であり、禅僧が顧問を務めた貿易でも大きな利益を享受できたのです。

二点目は日本の事情です。旧仏教が朝廷貴族の権益を守るだけの存在となり果てたのに対し、「自力による悟り」を説く禅宗は、自ら土地を開墾しつつ台頭した武家勢力にとってふさわしく、また、坐禅しかんだざ[正式には只管打坐と呼ぶ]という修行スタイルも理解しやすいものであったのです。別の見方をすれば、これまで文化的伝統というものは朝廷貴族が独占してきたわけですが、武家勢力も禅宗を取り込み、庇護することにより、これに対抗できるものを持つことが出来たと言えるのかも知れません。反面、無骨で粗野な武士が貴族化したということでもあります。

自 力による悟り——何と言っても禅宗の核心ですが、その前に「他力」について確認します。「他力（本願）」というのは、決して他人に頼るといような安直な姿勢ではありません。むしろ厳しい修行を積むわけですが、やはり完全円満な絶対的な境地に至ることは出来ません。そこで、究極的には宇宙の真理である阿弥陀如来にすぎる他はないのだ、という教えなのです。つまり、「他力」とは人を超えた存在である阿弥陀如来の力添えという意味です。

では「自力」となると、当然ながら阿弥陀如来にもすぎりません。「^{ふりゆうもんじ きょうげべつでん}不立文字・教外別伝・^{じきしにんしん けんしやうじやうぶつ}直指人心・見性成佛」という言葉で示されます。意味は、経典に記されたもの(教説)を超えた別のところに悟りの境地があるのであり、自分自身の中で成仏を図ることが肝要である、ということです。そして具体的な修行のスタイルが坐禅ということになるのです。

言葉に囚われ、頭で考えている限りは悟りに到達しない。文字に囚われるな、経典を棄てよ、さらに経典に頼ろうとする自分自身をも棄てよ、と言っているのです。実に厳しいですね。

そもそも**釈迦**は出家後に、当時のインドで支配的であったバラモン教の教えを学んでいます。しかし、得るものは無く、次に難行苦行を始めました。ところが、これでも得られることは無く、いよいよ菩提樹の下にて^{けっかふざ}結跏趺座に励まれたわけですね。そして30歳の12月6日、忽然として悟りを開きますが、富貴・美醜・善悪・賢愚などなど、相対的な一切のものを超えたわけですね。

つまり、坐禅というのは釈迦がされたのと同じ方法でやってみようということでありまして、その意味では最も素朴な、しかし実際は、最も厳しく困難な修行の方法なのだという事です。かの**達磨大師**は壁に向かうこと9年、ようやく悟りの境地に達したとの有名な逸話もあります。脚を組んで座り、静かに呼吸を整えていく修行は、想像以上に奥が深いと思われまます。

自 転車に初めて乗ることができた時のことを覚えていますか？ 親の介添えをもらいながら練習しましたね。最初はバランスがとれません。頭であれこれ考えて挑戦はするものの、フラフラした揚句に転んでしまいます。ところが不思議なもので、不意に、本当に突然ですが、よろめきながらも数mほど走れることがあって、何とも言えない感觸・感覚を自覚するのです。頭で考えるのではなく、もはや身体全体がごく自然に反応し、早晩に乗れるようになります。

禅宗における仏性の自覚もこれと似たところがあります。何かに囚われて自分を意識する時はうまくいきません。そういうものが無くなった時、自分の中にスーッと入って来るのです。

余談ながら、自転車に乗るためのマニュアル本は書店でも図書館でも見当たりません。やはり、言葉で表現するのが難しい領域のようですね。因みに、『**自転車に乗る漱石 百年前のロンドン**』という本では、英国留学中の夏目漱石が自転車乗りの練習をする場面が面白く描かれています。しかし、どうしたら乗れるようになるかという方法については、解決策は示されていません。

ついでに言えば、漱石は小説『**門**』の中で、鎌倉の禅宗寺院に短期参禅する主人公・野中宗助を描きますが、どうやら漱石自身の坐禅修行体験のようです。頭で考え抜いても解答は示されず、何も悟れなかった。悟りとは、表現の天才・漱石でも表現し得ない、特別な世界であったらしく、やはり雲水(=修行僧)のように、それ相当の修行が必要であると述べています。

五山文学……中国の北宋時代、科挙[官吏登用試験]に落第して禅僧となった者たちが、官僚文書に用いられる**四六駢儷文**を禅宗寺院に持ち込んだことが、五山文学の起点でした。四六駢儷文に通じることは、官僚貴族とコミュニケーションを図る上でも有効であったわけです。

日本の場合、五山の僧侶は漢文を流暢に駆使できる才能を、幕府からも求められていました。何故なら、幕府に代わって外交文書(中国との外交や貿易のため)を書く必要があったからです。僧侶にすれば、諸山→十刹→五山と出世の階段を駆け登るための必須の技能でもありました。

実際、日本の禅僧の吸収意欲は極めて高く、かのモンゴル軍が日本に二度も襲来し**元寇の役**があった時代ですら入元僧は200人以上を数えており、それ以前の入元僧よりも多いくらいです。まさに中国ブームなるものが起き、その結果、日本の禅院では幅広い**中国学・建築・造園・水墨・絵画・墨跡**(=書のこと)などなど、漢詩文を中核に**五山文学**と呼ばれる学芸が開花したのです。

釈迦の到達した境地を得るために、修行という範疇を超えてしまい、あらゆるものが磨かれ、昇華されていったのですが、**茶の湯**や**能楽**もこうした流れの中で大成されたものの一つでした。この時代は美術的にも優れた作品が多く、その道の大家と呼ばれる僧侶も輩出されていますね。

例えば、書・造園の**夢窓疏石**や水墨画の**雪舟等楊**などがとりわけ著名です。

しかし、**応仁文明の乱**以降は創造的な精神が衰え、ただ形式的に継承するだけの惰性的なものとなったので、中国的な趣味が薄れて和様化が進んでいきました。そのため、**五山を出て還俗し、儒家として独立する者が多くなりました**。例えば、江戸期における著名な儒学者たち(藤原惺窩・林羅山・谷時中・山崎闇斎など)は、その代表例とされています。

禅問答……今日、よく意味合いの判らない討論や対話のことを指しますが、これはそもそも禅宗(特に**臨済宗**)における代表的な修行なのです。前時代の優れた禅僧の言葉や行為が悟りの探求の課題[**公案**と呼ぶ]として、師から弟子へ伝えられています。公案をどのように理解するかという修行の中で交わされる言葉のやり取りが、いわゆる禅問答と呼ばれるのです。因みに、「**心頭を滅却すれば火も自ずから涼し**」という有名な言葉ですが、これなども「暑さ寒さはどうしたら避けられるか? 避けられる場所は何処か?」という問いに対して、中国の黄龍和尚が答えた詩句です。つまり、場所とかは問題ではなく、心の持ち方が大切であるということですね。日本でもこれを実践した人物の逸話が残っています。それは、武田信玄が師事した快川和尚が、織田信長に攻められ寺を焼かれた時に、この言葉を発して身を火中に投じたというものです。

このように見てきますと、「**文字や言葉に囚われるな、経典すら棄てなさい**」という教えとは、まさに容易ではないことが分かります。禅宗では生活全体を修行と考えますので、その意味ではあらゆるアプローチ方法が可能であるとも言えます。坐禅でも書画でも茶の湯でもいいのです。但し、根本的なものは言葉や文字では到達し得ないということですから、結局は心の問題です。

それを的確に示した有名な言葉が「**以心伝心**」というものです。「心をもって心を伝える」とは、要するに「心が通い合う」ということです。なあんだ、そんなことかと思われるかも知れません。しかし、これが想像以上に難しいことは、それこそ言葉を要しないのではないのでしょうか。